

第20話 賤嶽の戦い

兄の信雄と互いに権を争った織田信孝と共に、秀吉の威名を忌んで除こうとした柴田勝家が、賤嶽の戦いに敗れて、亡ぶと、その後はもはや織田氏の武將で秀吉に対抗する者が無くなる。

山崎の一戦に首尾よく逆臣明智光秀を破って、忽ちこれを誅して威名を揚げた秀吉が、信長の子の織田信孝と共に大津から安土に進んで行った時に、すでに信孝の兄の織田信雄も、近江の土山から進んで来ていた。

それで秀吉は、この2人の兄弟と共に尾張の清洲に行き、信長の長男信忠の子の三法師（後の秀信）に謁した。三法師はこの時未だ2才の幼児であり、本能寺の変の時には岐阜城にいたのですが、信忠の家来の前田玄以が、二条城での信忠の遺命を奉じて、急いでここに移したのです。

折から、亡君のために甲い合戦をと志しながら、秀吉に先を越された柴田勝家、滝川一益、その他の諸將もまた清洲に来ました。

清洲会議

そこで、6月18日に、一同は集まって、織田家の後の事の相談を始めた。先づ第1に問題となったのは、跡継ぎを誰に決めるかということでした。信雄を推すものと信孝を推すものの2派があって、議論は容易に決しなかった。しかし最後に、信雄は二男とは言え今度の光秀退治に何の功もなかったし、信孝は功はあったが、三男であるから兄を超えて跡継ぎになるのは不穏当である、ということになって、家は嫡男の三法師が嗣ぎ、信雄と信孝とがこれを補佐することにしました。

次には遺領の分配の問題があったが、これは、信雄に尾張を、信孝に美濃を、勝家に近江の長浜を、秀吉に山城をと風、その他の諸將にもそれぞれ領地を分け与えて、無事に片づいた。

そこで、諸將は、信長公在世の時と少しも変わりなくご奉公申し上げる、という誓書を織田家に納れて、おのおのその領国に帰った。

秀吉は、さきの大津の三井寺に本陣を置いた折に、京都に行って、本能寺の焼け跡を尋ねて、信長の遺骨と思われるものを悉く拾い収め、これを祭っておいたが、今度、清洲会議が済んで京都に帰ると、改めて亡君追善の大法会を営むことにした。

折から朝廷は、秀吉の今度の功を褒めて、特に従四位下に叙して右近衛の中將に上らせようとした。しかし、秀吉が固く辞退したために、重ねて特に使いをもってお諭しの上、改めて従五位下に叙して左近衛の少將に任じた。

大徳寺の法会

10月3日に、秀吉は畏まって、これをお受けして、その11日から17日の間、亡君信長のために紫

第20話 賤嶽の戦い

野の大徳寺で極めて盛大な法会を営んだ。殊に15日に葬儀の式を行った時には、秀吉の弟の秀長が10,000余人の警護の武士を下知して、非常への警戒をさせたというほどで、秀吉は棺の次の位牌のあとから、不動国行の作の信長の佩刀を持って、歩いて供をしたが、その外、衷衣を着けたお供3,000余人が2列になってつづいたというので、実際、前代未聞の盛儀であったと世に伝えられている通りだったでしょう。

この時、信長の位牌を安置するために秀吉が建立した摠見院は、今もなお大徳寺の寺内に存して、彼の主君思いを優に偲ばせます。こうして法会が終わると、秀吉は山崎の天王山の中腹の宝寺に1城を構えて、京都地方を鎮めることにしました。

織田信雄と織田信孝との不和

ところが、一方、三法師すなわち織田秀信を補佐することになっていた信雄と信孝とは、元來腹違い(訳注：母が異なる)の兄弟でした上に、同年同月の生まれで、まだ25才の若さでもあったので、互いに譲りあうようなこともなくて、常に仲が悪かった。

殊に信孝は勝気な人で、元気はあったが、思慮には乏しく、ややもすれば兄を軽蔑する風があった。彼は信雄を除いて、自分独りで織田家の実権を握ろうと考えたが、それには先づ、今、威名がますます高く、彼こそ信長の志を継いで全国を一統するであろうと世間から言われている秀吉をも除かねばならない。それには、秀吉に打ち勝つだけの兵力が要る。

折から、ちょうど織田家の老臣である柴田勝家や滝川一益らもまた新参の秀吉の威名を忌んで、機会でもあれば、これを滅ぼそうとしていたので、すなわち信孝は彼等と互いに相謀って、信雄と秀吉とを除く計画を立てました。

織田信孝、和を請う

秀吉はこれを知ると、天正10年11月、急に兵を率いて近江に行き、勝家の長浜城を攻めた。城将は勝家の養子の勝豊でしたが、本国の越前とは遠く離れて孤立していて、逆も支えることが出来なかった。勝豊はすぐに出でて降った。秀吉は兵を転じて美濃に向かい、行く行く諸城を下して岐阜に迫った。織田信孝もまた、支えることが出来なかった。あわてて和を請うた。秀吉はこれを許して山崎に帰った。時に12月29日でした。

美濃を平らげて帰ると、秀吉の威名はますます高まった。

長島の滝川一益

すでに相手が共に謀って、秀吉と信雄を除こうとしている以上、こちらもまた共に謀ってそれと対抗するのは当然です。秀吉は信雄と結んで、翌11年正月、共に兵を伊勢に進めて滝川一益を攻めた。しきりに諸城を陥れて、一益の本拠の長島に迫ろうとしていると、忽ち知らせがあつて、勝家が兵を進めて北近江に入ろうとしていると告げて来た。3月7日の事です。そこで、秀吉は信雄を伊勢に留めて一益に当らせて、自分はすぐに兵を班して近江に向かい、勝家と雌雄を決そうとしました。

柴田勝家の出兵

一方、柴田勝家は、去年11月、織田信孝が岐阜に囲まれた時には、北国は雪が深く、通路が困難でしたので、これを救うことが出来なかったで、残念に思っていた。しかし今、また一益が破られようとしているのを知ると、今度こそはと、急いでこれにに応じて兵を進めて来たので、先鋒は佐久間盛政で、彼は夜叉玄蕃といわれた勇士で、勝家の妹の子です。

3月7日に彼はすでに伊香郡の柳瀬附近に進んで陣取った。ついで勝家もまた前田利家らと共に進んで来て、本営を近江と越前との国境である内中尾山に置いた。

賤嶽の対陣

秀吉は3月10日に賤嶽に至り、つぶさに附近の地理を究めて、敵の情勢を

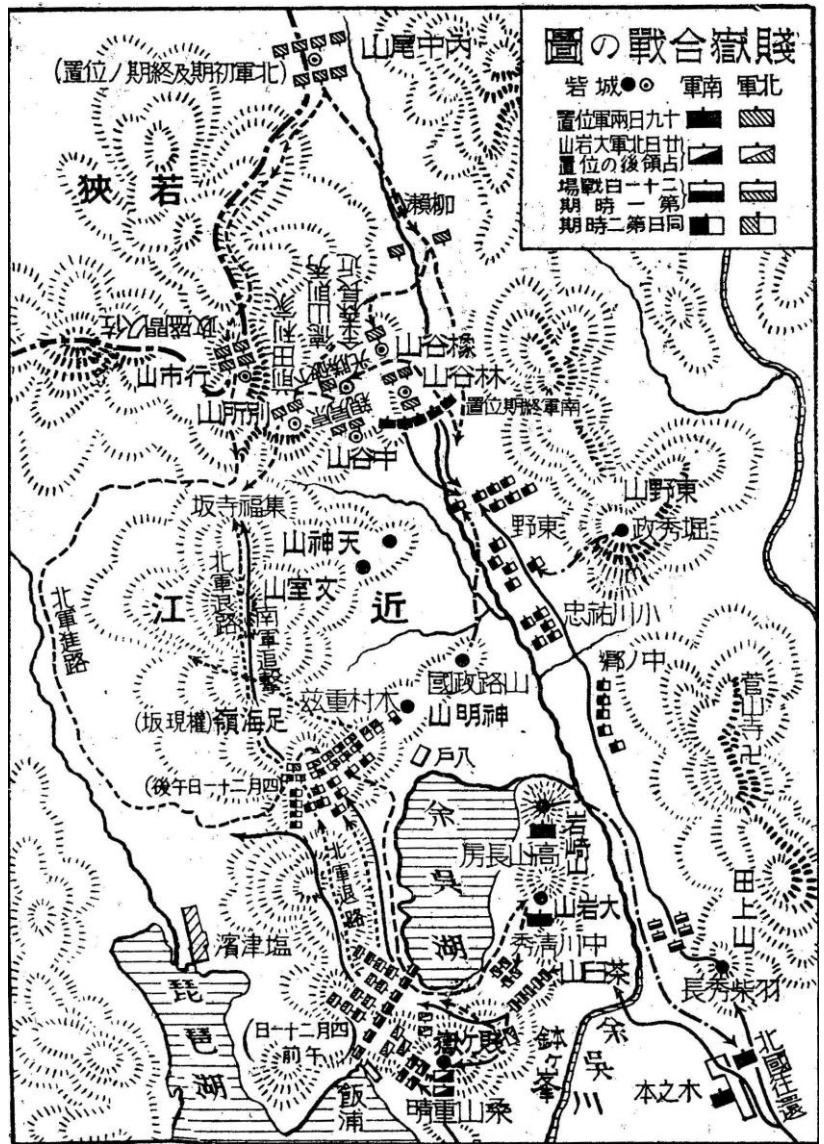
察して、これに対抗の策を立てた。彼は先づ余呉湖の南の賤嶽およびその附近に13箇所の砦を設け、多くの将士を配置してこれを守らせた外に、予備軍を木之本に陣をさせて、いざといえ、どの方面にでも援兵を出せるようにした。

また、琵琶湖の北岸の塩津や海津口にも兵を備えて、更に丹後の方面からは、海上から越前の兵を牽制させることにした。そして自分は退いて長浜城に本営を置いた。彼は賤嶽に持久の陣を張って、おもむろに形成を変化させるようにと仕向けながら、乗ずべき機会を待とうとしたのです。

すると、4月に入って、織田信孝が再び兵を岐阜に挙げて秀吉に反抗した。勿論、勝家、一益らに応じたのです。秀吉はこれを聞くと大いに怒って、17日に兵を率いて美濃に向かい、岐阜城を一挙に攻め落とそうとした。ところが、たまたま大雨が降って進めなくなったので、止む無く大垣に陣してその霽れるのを待っていた。

大岩山の陥落

一方、勝家は、ちょうどこの時、賤嶽の13の砦の中で、大岩山の中川清秀の砦だけが、未だ十分には出来上がっていない上に、他の砦との間も遠くて、最も落とし易いということを知ったので、今、秀吉の不在に乗じて、急にこの砦を落として敵の胆を寒からしめようと、佐久間盛政に命じてこれを襲



第20話 賤嶽の戦い

せた。4月20日の未明の事でした。全く不意を襲われた清秀は、必死になってこれを防いだが、その効もなく、ついに討ち死にして砦は落ちました。

佐久間盛政の豪語

この勝利を盛政が勝家に知らせると、勝家も大いに喜んで、盛政の働きを大いに褒めたが、折り返して使いを馳せて、秀吉は気早な大将だから、間もなく大兵を率いて攻め寄せて来るにちがいない。勝利に誇らず、すぐに兵を引き返せと盛政に命じた。けれども、盛政はすでに心が驕っていました。彼は勝家の命令に従おうとはしなかった。むしろこの勢いに乗じて、他の砦をもことごとく攻め落とし、一挙に敵を微塵にしてくれようと豪語していた。

勝家は使いの返事を聞いて驚いて、重ねて、再三再四、急使を馳せて引き返させようとしたけれども、ついに盛政は聞かなかった。盛政は大岩山、鉢峯などの要所々々に将卒を配置して、自分は尾野路山に陣を取ってその日を暮らした。

秀吉の一騎駆け

大垣に清秀戦死の知らせが届いたのは其の日の昼過ぎでした。秀吉はその使いの者を前に呼んで、盛政は引き取ったかと訊いた。「いえ、まだ引き取りません。尾野路山に陣を取って、他の砦をも攻めようとしているようです」と答えるのを皆まで聞かずに、彼は腰刀を抜いて、額にあてて、「ありがたい、この合戦は勝ったぞ!」と5、6度ばかり躍りあがって、直ぐに一部の兵を大垣に留めて信孝の抑えにすると、自分は馬に鞭打って、真っ先にただ1騎、乗継ぎ、乗継ぎ、大急ぎに駆けつけて、翌21日の夜明方にはもう盛政の軍に押し寄せた。全軍がこれにつづいた。

賤嶽の七本槍

油断していた盛政が秀吉の機敏に驚いたのは言うまでも無い。彼は勝家の言葉に従わなかったのを悔いた。しかし、もう追付かなかった。けれども、彼も夜叉玄蕃の名を取った猛将です。部下を励まし励まし大いに奮戦した。この時、秀吉の旗本の加藤清正、福島正則、糟屋武則、平野長泰、脇坂安治、加藤嘉明、片桐且元らの7人の若武者は、おのおの槍を揮って突進して、大いに敵を破った。世に名高い賤嶽の七本槍というのがこれで、中でも、加藤清正が山路正国と槍を合わせて大いに戦った末に、組討をして、崖から転がり落ちた話は殊に有名です。

さて、佐久間盛政の軍は、大いに奮戦したが、塩津を固めていた秀吉方の丹羽長秀の軍が、側面からもまた迫って来ると、ついに全く潰えて敗走した。

秀吉は勢いに乗じてこれを追って、勝家の陣に迫った。この時、柴田勝家の軍はすでに殆ど逃げて、僅かに3,000ばかりしか残っていなかった。彼はこれを以って大いに奮戦して、ここで討ち死にするつもりでいたが、家来らに強いて勧められ、辛うじて身を以って逃れて、越前の北荘（今の福井市）の本城に入りました。

第20話 賤嶽の戦い

かついえ じさつ 勝家の自殺

ひでよし あと お ふちゆう たけふ いた まえだとしえ くだ すす きたのしょう かこ かついえ
秀吉はその後を追って府中（今の武生）に至り、前田利家を降して、進んで北庄を囲んだ。勝家
も、もはやいかんとも出来なかったもので、今はこれまでと、城に火を放って夫人の織田氏（小谷方。元の浅井
ながまさ とも じさつ かついえ
長政の妻）と共に自殺した。4月24日の事です。時に柴田勝家は54才、夫人は37才でした。

なお、この時、あさいながまさ むすめ とも し かわいそう あんないしゃ じょうがい だ
浅井長政の3人の娘は、共に死なせるのは可哀想だと、案内者をつけて城外に出
て、ひそかにいちじょうだに かく ま ひでよし さが だ ひでよし のぶなが
て、ひそかに一乗谷に隠れさせたが、間もなく秀吉の探し出すところとなりました。しかし、秀吉は、信長
ゆいしょ ひとびと かのじよら ていちよう と あつか おぢ のぶなが のぶかね あづ
に由緒ある人々として彼女等を鄭重に取り扱って、ついに伯父（信長の弟）の信兼にこれを預けた。
（この3人の娘が成人した後の事は、既に前に述べておきました。）

もりまさ さいご 盛政の最後

これ さ しづがたけ に だ さく まりまさ おやま こころざ
之より先き、賤嶽を逃げ出した佐久間盛政は、自分の本城の尾山城（金沢市）へと志したのですが、
つるが ひでよし ぶか と ひでよし お けいし ゆうし さと じぶん
敦賀まで行った時に、秀吉の部下に捕らえられた。秀吉は、惜しむべき勇士だからと、これを諭して、自分
はいか ぞく もりまさ おん き うら わす き
の配下に属させようとしたが、盛政は「恩を着せても怨みは忘れないぞ」と言って肯かなかったので、つい
にこの年の5月、京都のろくじょうがわら き
六條河原で斬らせた。時に年は30才でした。

のぶたか じさつ 織田信孝の自殺

また、ぎふじょう へい あ のぶたか ほう のぶお とど かずまさ あ
岐阜城に兵を挙げた織田信孝の方へは、伊勢の織田信雄が一部の兵を留めて一益に当たらせて
のぶお みづか すす ぎふじょう かこ かついえ ほろ し つた じょう
おいて、信雄が自ら進んで岐阜城を囲んだ。すると間もなく、柴田勝家の亡びた知らせが伝わって、城
ちゆう きせい おお おとろ のぶお のぶたか と ちた ほんとう うつみ うつ ま
中の氣勢が大いに衰えた。信雄は人をやって信孝を説かせて、尾張の知多半島の内海に移らせたが、間
もなくさら じさつ すす のぶたか じせい
もなく更に人をやって自殺を勧めさせた。それで、織田信孝は、5月2日に自殺したが、その時の辞世と
して、

じゅうだい しゅう うつみ うら はしばちくぜん
重代の主を内海の浦なれば みのおわりをば羽柴筑前

という歌が伝えられている。へいじ らん おさただだまさ みなものよしとも あざむ う こと うた こ
昔、平治の乱の時に、長田忠致が源義朝を欺いて討った事が歌い込めら
れていきます（訳注：じゅうだい うつみ う み か はか の ま
重代は昔の意、内海は討つ身を掛ける）。時に年は26才でした。その墓は今も野間
おおみどうじ よしとも はか そば あ
の大御堂寺の義朝の墓の傍に在ります。

かずまさ こうふく 一益の降伏

ひでよし かついえ ほろ のち いきお じょう かが のと えっちゅう へいてい えちご うえすぎかけつ
秀吉は柴田勝家を滅ぼして後、勢いに乗じて加賀、能登、越中を平定し、越後の上杉景勝からは、
ひとしち けん わ こ ゆる まえだとしえ かが おやまじょう お ほくりく しづ
人質を献じて和を請うて来たので、これを許して、前田利家を加賀の尾山城に置いて北陸を鎮めさせて、5
月に京都に帰った。ほっこくへいてい こう しょう ひでよし さんぎ にん じゅしい じょ
朝廷は北国平定の功を賞して、秀吉を参議に任じて従四位に叙した。

たきがわかずまさ は、この頃までなお伊勢のながしま よ かついえ ほろ のぶたか じさつ
滝川一益は、この頃までなお伊勢の長島に拠っていたが、すでに勝家が亡びて、信孝も自殺してしまっ
たので、ついにちからつ ひでよし くだ
たので、ついに力尽きて秀吉に降った。

こうして織田氏のぶしょう ひでよし たいこう もの な ひでよし いめい のぶなが
武將で秀吉に対抗する者が無いようになると、秀吉に威名はますますあがって、信長
いぎょう しぜん て お き
の遺業は自然とその手に落ちて来ました。

第 20 話 賤嶽の戦い

(第 20 話 ^{しづがたけ} 賤嶽の戦い 終わり。 次は前頁に戻り、 第 21 話 豊臣秀吉の国内統一 〜)